

文闘季の旗

No. 10
69.5.26
立命館大学
全学共闘会議
文学部闘争委員会

闘争宣言

立命館の全ての心ある学友諸君、
とりわけ情況を鋭敏に感じ取り得
る文学部の学友諸君、

我々立命館大学全学共闘会議文学
部闘争委員会は、大学当局の人間
性を無視した闘争圧殺を自身の怒
りさきめて学友諸君に訴えたと同
時に、何如なる非人間的な闘争圧
殺にも屈せずフェニックスのごと
く羽ばたいて見せる事を宣言する。
五月二十日の辱辱の日を忘れない。
その物理力による弾圧は、我々の
闘争、団結の力を強めこそすれ、
弱めることに決してはならない。
事を、放牧達、我々の方はそうい
う事を、厂史を通じて教えたとは
ないか。自分自身の学術的信念を喪
切つて、厂史を歪曲し、支配者の
論理を今や我々に強要しようとする
のか。

今や時計の針は迷散しようとして
いる。あの新聞社事件当時の陰
湿な無気力な秩序にもどうとうと
している。最初から一貫して向題提
起を行ない、主体的に闘つている
我々を民権、機動隊を使いながら
圧殺し、もう一方で改革案があるも
のと云うつめせながら、これだけ
疎歩しただけならいいではないか。
これ以上文句のあるやつは話す必
要はない。しとの態度に出ている
我々の向題提起と直接対峙せず、
自らが、つてに向題を設定し、とし
て自らを危うくしなさい範囲での議
歩を、それを取つていよいよ部分
に同意を求め自身によつて正当化
しようとする教授会、当局の態度
は見えずいてくる。

当局、民権が何如にデマ宣伝を
し、真実をインペイしようとも最
早叶つてはまさか机留部分無確

立命館大学の野辺送り

奥に存在しているといふことを明らかにして
おきたい。
現在社会の亀裂に比しすら目をみせき、
平和と民主主義、その象徴「わだつた
り上げの事は、最早、反動的、体的意識又
外の何ものでもない。我々は、幻想の合一
である戦後平和と民主主義の中の亀裂を見つ
め、その亀裂を止揚すべく闘わなければな
らない。その過程で右翼的に分裂する部分
も当然生まれてくる。我々はこの反革命部分
を打倒しなれば我々の前進はあり得ない。
亀裂をひくし、抽象的に「平和と民主主義」
をひかゆることは左翼的進歩を押し出し、自
らの体制内の安全をめぐす党派的利害以外の
何物でもない事を宣言し、亀裂を深めるため
闘争を断固継続するであらう。そのためにも
闘わねばならぬの免罪符となり下っている「わ
だつた」は倒されねばならぬ。下の代。
二十日立命、二十三日京大において大弾圧
をうけ、一時的震動は止められ得ないにして
も心や広小階キャンパスに再生し、更なる
闘争の前進を断固取る事を事実でも、示す
であらう。

一九六九年五月二十六日

二十日あつたは二十三日における大
弾圧によって、不当に逮捕され、良
傷した多くの学友のため、又更なる
闘争の継続のためにより多くの資金
カンパをねがひます。